●誌上教材研究（隔月連載）　その 33

中学校教師による技術・家庭科の教材研究―1 枚の写真を通して

木材から見る森林資源

作成：河野卓也（かわの　たくや／滋賀大学教育学部附属中学校　教諭）
寸評：山下宏文（やました　ひろぶみ／京都教育大学　教授）*

◀教材に用いるさまざまな木材標本

語り：「“生きている”樹木や森林は，私たちにとってかけがえのないものです。季節ごとの表情を見せ，さまざまな生命を育みながら成長していく木々は，私たちの生命を支え希望を与えてくれる存在です。しかし，樹木は生物としての寿命を終えた後も，木材として生き続けます。しっかり手入れをすれば，生物としての寿命よりはるかに長い間木材として生き続けることは，古い木造建築を見れば明らかなことでしょう。木材として見つめる樹木は，青々と茂る樹木とは違った魅力を私たちに教えてくれます。

多くの木材の標本を見つめていると，樹木それぞれの個性が伝わってきます。固いもの・やわらかいもの，重いもの・軽いもの。国産のもの・外国産のもの。においのきついものや，木材とは思えない色をしたもの。さまざまな木材が標本になっても，固有の“種”としての個性を主張しています。中には，絶滅の危機に瀕（ひん）する樹木もあります。人間が自分たちの都合で乱伐を繰り返したことによって，特定の樹種が絶滅の危機に瀕し，伐採や木材としての取引きが禁止されているものがあります。世界有数の森林国である日本が木材を輸入し，かたや世界の森林は激減しています。そして，日本の森林に人の手が入らず荒れていく現状を見ると，どこかで何かを間違ったのかもしれないと感じずにはいられません。

木材の標本を手のひらに握りしめると，標本は生き生きとした樹木であったときと同じように，さまざまなことを私たちに語りかけてきます。木でできた家に住み，木製品を日常的に使う私たちは，その木材たちの声に，今こそ耳を傾けなければならないのかもしれません。」

意図（河野）：中学校技術・家庭科，技術分野では，材料としての木材の特性を学習する。用途が広く，他の材料にない特性を持つ木材について，すぐれた材料としてとらえることはできても，木材を産出する森林を取り巻く問題にまで思いを巡らせることはあまりない。国産材・外材をとり混ぜた多種の標本に触れることによって，材料としての特性を実物を通して学ばせると共に，それぞれの樹種が置かれている状況にまで踏み込んで考えてもらいたいと願って授業を進めている。

寸評（山下）：中学校技術・家庭科の新学習指導要領（平成 20 年版）の記述を見ると，旧版では内容の取扱いに示されていた「木材」という用語が使用されていない。しかし，解説をみると「木材」の扱いはこれまでと変わりはないことが分かる。森林の持つ生産的機能や木材の利用については，環境保全や地球温暖化防止などと密接に関わっていることに注目する必要がある。義務教育で木材について学ぶのはこの技術分野だけであり，それだけにここでの扱いが極めて重要ということになる。

＊山下…〒 612-8522 京都市伏見区深草藤森町 1　Tel 075-644-8219（直通）